

Ⅲ 学校評価学校関係者評価

1. 学園保幼小中一貫教育報告一覧

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
1 峰山学園	【教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【目指す子ども像】 ○主体的に学び続ける子ども ○人を思いやり仲間と共に高め合える子ども ○粘り強く挑戦し続ける子ども
2 大宮学園	(1) 教育目標 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 (2) 目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども (知) ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども (徳) ○ 心身を鍛え、活動的な子ども (体)
3 網野学園	【教育目標】 将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
4 丹後学園	教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】
5 弥栄学園	1 教育目標 【ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで自他を大切にして、たくましく生き抜く子どもの育成】 2 目指す子ども像 (1) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む (2) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間を大切にし、ともに知恵を絞る (3) 心身をきたえ、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける
6 久美浜学園	【教育目標】 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 【目指す子ども像】 (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2. 京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
1 峰山こども園	“元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き！” ～互いに認め合える心豊かな子どもをめざして～ 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整え、持続力や協同力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 互いの良さを認め合い、心豊かに意欲的に活動する力を育てる。
2 大宮こども園	○人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子ども ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ○テーマ 『わくわく げんき えがおのわ』 ～伸び伸びと遊び、ともに育つ子どもをめざして～

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
3 網野こども園	『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	- 生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 - 地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 - 職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。
5 弥栄こども園	- 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 - 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 - 身近な人や地域に関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。
6 かぶと山こども園	こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った たくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～やってみたい！やってみよう！一人一人が輝くために～ - 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 - 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 - 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
7 峰山小学校	多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。
8 いさなご小学校	教育目標「ふるさとを愛し 多様な人となつながら学び探究し続け子どもの育成」 目指す子ども像 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども
9 しんざん小学校	【峰山学園 教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人となつながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【峰山学園 めざす生徒像】 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども
10 長岡小学校	「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標 「ふるさとを愛し、多様な人となつながら学び、探究し続ける子どもの育成」に迫る。 〈峰山学園 めざす子ども像〉 ・主体的に学び続ける子ども ・人を思いやり仲間と共に高め合える子ども ・粘り強く挑戦し続ける子ども
11 大宮第一小学校	「学校教育目標」(長期目標) ◆自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校 【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校 【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校 【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校 【地域の方】
12 大宮南小学校	「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども(知) ・自他を大切にし、思いやりのある子ども(徳) ・心身を鍛え、活動的な子ども(体) 全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成を目指す。
13 網野北小学校	1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
15 島津小学校	「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る」 (知)意欲的に学習に取り組む子ども (徳)規範意識をもち、仲間と支え合う子ども (体)粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 網野学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。
16 橘小学校	【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1) 言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2) 自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3) ねばり強く身体を鍛える子(体)
19 吉野小学校	1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進 2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。 3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・ 知識と技を磨き、活用する子 ・ 自他の良さを知り、共に伸びる子 ・ 心身をきたえ、何事もやりぬく子
21 久美浜小学校	教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心を持ち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども（知） (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども（徳） (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども（体） 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～ 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進
22 高龍小学校	意欲的に生活・学習に取り組むたくましい子どもの育成 ― 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ― 1 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども 2 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども 3 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子ども ※ 保護者・地域に信頼される学校
23 かぶと山小学校	1 久美浜学園教育目標 2 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」めざす児童像 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子 (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子
24 峰山中学校	【教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【めざす生徒像】 (1) 主体的に学び続ける子ども (2) 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども (3) 粘り強く挑戦し続ける子ども 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 (2) 「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育の推進 (3) つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
25 大宮中学校	(大宮学園教育目標) 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 (大宮中学校重点目標) 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～人権尊重を基盤に、個をほめて、集団で認めて、他者（集団）とつなぐ～ (実践上の視点) ○生徒一人一人が「自己指導力」を身に付けるための支援（あらゆる教育活動の中で） ・「安全・安心な風土」の醸成 ・「自己存在感」を育てる ・「共感的な人間関係」を育てる ・「自己決定の場」の提供 ○「居場所づくり」と「絆づくり」 ・自己存在感が感じられる場所作り（教職員） ・主体的・共同的な活動を通して「絆」を紡いでいく（生徒自身）
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 1 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 3 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	○確かな学力の育成とわかる授業づくりのための不断の工夫改善 ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の充実の推進による教育活動の充実
28 弥栄中学校	1 「誠実」を大切にし、全教職員で、生徒・保護者、地域との信頼関係を築く。 2 主体的・対話的に学び、互いに認め高めあうことを通して、人権尊重に基づく人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 3 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくり（わかる・できる授業、小中の円滑な接続）を進める。 4 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、探究する力・表現する力を伸ばす生徒を育てる。 5 主体的に未来を見つめ、そのための今を大切にし、自分の進路に向かうことができる生徒を育てる。
29 久美浜中学校	<久美浜学園> 指導の重点：学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (3) 家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前なのが当たり前でできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 1 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 2 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 3 不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 4 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立

令和6年度 峰山学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

【教育目標】

「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」

【目指す子ども像】

- 主体的に学び続ける子ども
- 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども
- 粘り強く挑戦し続ける子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

【経営方針】

(1) 夢や希望をもち、多様な人とつながりながら生き生きと活動する学園【幼児・児童・生徒】

- ア 自分の将来を展望し、主体的に学ぶ（遊ぶ）ことができる取組を進める。
- イ 互いの思いや考えを認め合い、高め合えることができる取組を進める。
- ウ 粘り強く挑戦し、自らの心や体を鍛えることができる取組を進める。

(2) 子どもの社会的自立に向けて、全教職員が責任をもつ学園【教職員】

- ア 幼児児童生徒の願い・希望・悩みに正面から向き合い、共感的理解と指導に努める。
- イ 幼児児童生徒の考えを広げ深める授業・生活の創造に取り組み、専門性の向上を図る。
- ウ 就学前から、社会的自立に向けて一貫性・系統性のある指導を行う。
- エ 互いに学び合い、協働的な教育活動を展開する組織を構築する。
- オ 保護者や地域の人達と連携して幼児児童生徒の社会的自立を図る指導を進める。

(3) 保護者・地域とともにある学園【保護者・地域】

- ア P T A・地域と連携した自己有用感を高める取組を進める。
- イ 保護者・地域へ双方向の情報発信を行う。
- ウ 学校運営協議会を核とし、峰山町民が学校の教育活動を積極的に支援する取組を進める。

【指導の重点】

「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成」「評価を見通した取組の充実」を各子ども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

(1) 確かな学力の育成

他者と関わりながら深く学び、社会的に自立して主体的に生き抜くための学力を育てる。そのために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した教育を進める。（遊びや授業の研究）

ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びを進める。

- ①学習や活動に関心をもち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び・遊び
- ②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び・遊び
- ③各教科の「見方・考え方」を働かせながら、関連付けたり情報を整理したりして問題を解決しようとする深い学び
- ④探究的な学習活動を通して全ての学習の基盤となる資質・能力の育成
- ⑤授業と関連させた家庭学習の質的転換

イ	タブレット等のICT器機を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する。(小・中学校)
ウ	単元全体を通して「付けたい力」を踏まえた指導計画と授業設計に努める。(小・中学校)
(2)	コミュニケーション能力の育成
	遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。
ア	幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」(心理的安全性)を進める。
イ	お互いを認め合う心の醸成を図る。
ウ	人とつながり学ぶ楽しさ(協働性)を味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。
	(自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成)
(3)	評価を見通した取組の充実
ア	学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実
イ	教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善
ウ	「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果に基づく教育実践の改善

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての園・学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての園・学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け (3) 学園内の全ての園・学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け	(1) 幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会を集合型で実施し、峰山学園の幼児・児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営できた。 ○児童・生徒の状況については、各会、部会で共通理解を図り、取組に生かしている。担任会でも、児童の状況について交流し、指導方法を学び合うことができた。 (2) 学校運営及び進行管理 ○経営会議を定期的に行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。 ○経営会議で、運営会議、教育課程会議、生徒指導部会、学習指導部会の取組等を把握するとともに方向性を確認することができた。 ○今年度も共同学校事務室室長も経営会議に参加して学園の重点や取組を把握し、児童生徒の学習環境や学園予算の検討など、共同学校事務室の運営に生かすことができた。 ○学園児童・生徒アンケート、教職員アンケートの結果について、運営会議で丁寧な分析ができた。この分析をもとに次年度の改善策を考えていく。 ○運営会議で計画した教頭が行事へ参加できるよう、各校で調整を図った。
就学前から中学校卒業までを見	(1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成	(1) 0期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導 ○教育課程会議で「(0)Ⅰ～Ⅲ期における『目指

通して一貫した指導、教育課程	ア 自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、確かな学力の充実・向上のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善 ・授業と連動させた家庭学習 ・ICTの効果的・効率的な活用 イ 0期～Ⅰ期、Ⅰ期・Ⅱ期（汽水域を含む）・Ⅲ期の指導目標を踏まえた一貫した指導＜(0)Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧＞ ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証…中1ギャップの捉え直し ・単元全体を通して「付きたい力」を踏まえた指導計画と授業設計に努める。 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・指導体制の工夫 ・小学校高学年での一部教科担任制 ・中1ふりスタ（正式名称 中学校1年生集中振り返り学習） ・小学校4年生ふりスタ ・中学校体験授業（年1回） ・「5年生・6年生の心構え」 ・夢・未来式（小学校4年生）、立志式（中学校2年生） ウ 園小の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの実践と検証（「幼保小架け橋プログラム」の内容を反映したスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムになるよう見直す。） (2) 不登校・いじめの解消 ア 安心して学べる（遊べる）環境づくりについての研究（心理的安全性の醸成） イ 「5・6年生の心構え」と各校の実態を踏まえて、積極的な生徒指導を行うとともに、生徒指導の4つの視点を生かした学級づくり・授業づくりについて研究 ウ 不登校の未然防止に向けて組織的な取組を進める。 ・学園内で気になる子どもの実態交流を行い、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究 ・小・中の引き継ぎシートの丁寧な作成・	す姿』一覧」について見直しを図った。年度末研修会で全教職員に周知し、来年度から実践を積み上げていきたい。 (2) 就学前からの一貫した指導の充実、教育課程編成 ○年間10回の経営会議を実施し、10年間を見通した指導について取組を進め、保幼小中一貫教育を推進することができた。また、教育支援部会・こども園の参加の1年担任会の取組で、園児・児童が付けた力を踏まえた接続を意識した支援を行った。 ○年4回の全教職員の研修会を研究の節目として位置付け、「一貫した指導」について共有し、実践の成果を明らかにしてきた。学園の教職員が共通に学び方向性を再確認することができた。 ○指導の重点である確かな学力の育成を目指し、昨年度から重点目標を「主体的・対話的で深い学び」とし、視点を具体的に示し、児童生徒が主体的に学びに向かう授業改善の視点を明確にして実践できた。 ○秋季研修会は長岡小学校で開催し、全学級の授業公開や研究協議を実施した。授業では、対話を通して学び合うことや、発問により対話が生まれ深い学びに繋がること等を学ぶことができた。研究協議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びに向けて、心理的安全性を基盤とすること、子どもが主体となるよう教師は伴走すること、学びを深めるために、教科の見方・考え方に着目すること等について深めることができた。 1校の研究を全員で参観・共有できる良さがあるため、次年度以降も1校開催とする。 R7：峰山小 R8：いさなご小 R9：しんざん小の予定だったが、R8年度に長岡小といさなご小が適正配置されるため、しんざん小と入れ替え、R8しんざん小、R9いさなご小とする。 ○●担任会の協議内容として、教科や単元を決めて教材研究ができた。しかし、単元全体を通して「付きたい力」を踏まえた指導計画を立て授業設計をする必要性を提起することが十分ではなかった。指導の重点(1)ア③にあるように、見方・考え方を働かせながら問題を解決する深い学びのための教材研究としたい。5・6年担任会には中学校からも参加しているので、Ⅱ期の修了を見通し「中1ギャップ」についてさらに研究していく。 ○●昨年度教育課程会議で作成した「家庭学習において目指す姿」系統表をもとに各校で実践を進めた。担任会では、探究的な家庭学習についての実践交流を行った。Ⅱ期、Ⅲ期で計画的に家庭
-----------------------	---	--

	引き継ぎ（引き継ぎシートは、毎年経営会議で見直す。） ・教育支援部会で具体的な事例研究（SC・SSW の専門的な見立てからの学び）	学習ができる力を付けさせていきたい。 ○●「夢・未来式」「立志式」に取り組み、自分の夢や将来について意識の向上につながった。第4学年をⅠ期の修了学年ととらえ、自分の成長・将来への展望について各校で取組を進めることができた。今年度の学園の目標を踏まえて教育課程会議でそれらの目標を見直した。学園としてねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指していく。 ○1年担任会では、こども園の園長・担任がすべて参加し園小連携を行った。こども園・小学校での指導を交流・理解し、それぞれの指導に生かすことができた。 ○●こども園から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報の引き継ぎについては、個人情報であることを踏まえ、対応と内容については、毎年確認をして連携する。 アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、園で育んだ力（10の姿）を小学校の指導に生かせるように研究・実践した。1年担任会で幼小連携について研究し、各校の実践につなげることができた。 ○こども園の参観は2つの園に参観者を分け、調整して実施した。10年間のスタートである0期の実践を参観して、自分から人と関わるための環境設定や、思いや行動を引き出すために、どのようにことば掛けを行っているかを学んだ。参観後の交流は取れないが、感想は紙面でこども園に提供できた。次年度も、夏季研修会の午前中に参観し、午後の全体研修では幼児期の指導について実践報告を行う。 ○各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、日々、肯定的な評価や違いを認める指導を行っており、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○●SNS アンケート実施・結果分析・活用、篠原講師による SNS 講演会等の取組をとおして、SNSに係る指導を小・中学校で進めることができた。今年度は、7月に講習会を実施し、夏休み前の指導に活用できた。暑い中での講習会であったため、来年度は時期を変更する。 ●SNSにかかる指導については、メディアコントロールが弱い実態を踏まえ、峰山学園PTAとの連携が必要である。 ●「5・6年生の心構え」は、令和3年度に変更して現在の内容になっている。内容を変更した趣旨を共有し、全員で確認をしながら指導を進めていく必要がある。
--	---	--

幼児児童生徒、 教職員の交流と 協働	(1) 「目指す子ども像」の実現 ⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業づくりを通じた研修会 ウ 担任会を通じた研修 (2) 「集団の中で豊かに人とかかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭（6年生が練習を参観、体験授業） イ 部活動体験 ウ 合同授業・学びの交流等 エ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 オ クリーンキャンペーン カ SNS 講演会	○「主体的・対話的で深い学び」を推進するために、学習指導部が作成した『『主体的・対話的で深い学び』を実現するために こども園、小・中学校で大切にしている視点』に沿って各小中学校ともに授業研究に取り組むことができた。授業研究等でも、この視点に沿って研修できた。 ○全教職員の研修会・各部会を通して、教職員の交流を図ることができた。夏季研修会では、岐阜聖徳学園大学 教授 福地淳宏様に「主体的・対話的で深い『子どもの学び』を教室で実現するために～端末活用と『探究』を見据えて～」と題し講演をしていただいた。振り返りやアウトプットの大切さ等について学び、指導の一貫性につながった。 ○特別支援学級「ふれあい交流会」では、小学校1年生から中学生までが楽しめる内容が工夫され、中学生が中心となって進め交流できた。 ○部活動体験・体験授業・ふれあい交流会等、交流を通して中学校への不安を軽減することができた。部活動体験では、優しく丁寧に指導する中学生の姿から「あこがれ」を感じることもできた。体験授業では、中学校のイメージが身近なものになった。他校の児童と交流する機会にもしていくために、目標を見直していく。また、児童の主体性を重視し、なるべく希望する教科学習が体験できるようにする。部活動体験・体験授業ともに次年度も1回の実施とする。 ○クリーンキャンペーンは、今年度、小学校は社会科の学習や総合的な学習の時間と絡められるように3年生が参加することとした。地域の方と一緒に取り組める行事であり地域性を育む観点からも、課題を精査し内容の充実を図った上で継続できるように検討していく。 ○1学期から中学校への見通しをもたせるために、6月に合唱祭の練習の参観を行った。部活動体験は暑さを考慮し11月中旬に、体験授業は11月下旬に実施した。
家庭、地域との 連携、情報発信	(1) 中学校区の家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (2) 「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (3) 「峰山学園」学校評価に基づく学校関係者評価委員による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (4) 峰山町民が学園の教育活動に積極	○学園の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）と連携した峰山学園PTA統一目標を策定し、具体的に「峰山学園PTAみんなでおはよう運動及び交通安全指導」を実施できた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレット等での発信が定着してきており、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○峰山学園地域コーディネーターを窓口とし、学校支援ボランティア等を活用し、話を聞いたり

	的に参加し、支援できる仕組み（学校支援ボランティア 峰山学園学校運営協議会等）の機能化と充実	体験したりする機会を設けて学べた。地域の方が学校教育活動に積極的に参加できる取組を進められた。
--	--	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
・峰山学園として、昨年度までの10年間の成果・課題を明確にし、これからの10年を見据え、今年度、教育目標やめざす子ども像、評価等を改訂した。 ●コロナ禍で取組等が実施できなかった状況が数年続いたことで、保幼小中一貫教育の趣旨等の共通理解が薄れ、受け身になっている取組があった。 ○●課題であった「心理的安全性」については、児童生徒アンケート結果によると「安心して自分の思いや考えを表現している」項目で肯定的な評価が80%あり、教育相談部会や生徒指導部会及び学級経営や授業づくりにおいて教員が意識して指導をした成果であると言える。一方で、否定的な評価の児童生徒が20%いることも念頭に置き、指導・支援を継続していきたい。 ○●不登校の状況については、昨年度より小学校では改善、中学校では同等の傾向にある。アセスメントにより個に応じた支援（ケース会議で確認しながらスモールステップで段階を踏まえた指導・支援、個別に寄り添う関係作りの継続、校内フリースクールや学習ルーム、ホットルーム等、別室を工夫して利用した取組、非認知指導等）を進めてきた成果である。今後も不登校の未然防止に向けて、児童生徒が安心して学べる環境を整えていく。 ●課題であった「家庭学習などにおける主体的な学び」については、アンケート結果によると、児童生徒・教職員ともにあまり改善がみられなかった。学習指導部が中心となり改善策を検討していきたい。 ○●「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりについて、夏季研修会における講演、秋季研修会やその他の参観、担任会等において研修し意識を高めることができた。「深い学び」ができる授業を目指し、引き続き研鑽していきたい。 ○教育目標の「ふるさとを愛し」については、97%の児童生徒が「今住んでいる地域が好きである。」と回答している。今後も丹後学の推進や地域の方との連携を深めていきたい。	・今年度改訂した教育目標やめざす子ども像、評価等について、社会情勢や子どもの状況に応じて、適宜、見直していく。 ・保幼小中一貫教育が連携にとどまらず一貫教育となるよう、再度、個々の取組や目標を見直し、カリキュラムマネジメントを行いながら進める。生徒（会）と児童（会）との取組等も現有する組織の中で実施できるように検討する。そのための担任会の時間を確保する。（開始時刻を早めたり Teams の会議を必要に応じて適宜開催したりする。） ・授業づくりについては、「見方・考え方」を働かせたり、探究的な学習を手法としたりする「主体的・対話的で深い学び」の授業についての研究を深める。夏季研修会での講演では、「探究的な学び」について学ぶ。担任会では、これらを踏まえた授業を目指して教材研究や授業構想をする。 ・家庭学習を授業と連動させ、子ども達が自己調整をしながら計画的に取り組んだり、探究的な学びに繋げたりしていけるよう教職員が意識して指導を行う。 ・運営会議で計画した行事については、担当した教頭も参加し状況を把握する。 ・行事については、以下の通りである。

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

- | | |
|-------------|---|
| (1) 教育目標 | 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 |
| (2) 目指す子ども像 | ○意欲的に学び、チャレンジする子ども (知)
○自他を大切にし、思いやりのある子ども (徳)
○心身を鍛え、活動的な子ども (体) |

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ※大宮学園を支えるのは「人権教育」、そして「ことばの力」の育成
- (1) 確かな学力の育成：「授業づくりの視点 9」「言語活用カリキュラム」の活用
- ア 基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
- イ 小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）
- (ア)「主体的・対話的で深い学び」を通して、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業研究を充実させる。
- (イ)これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「ICTの効果的な活用」「自己調整力の向上」等、これからの教育課題への連動を図る。
- (ウ)授業研究会・保幼参観の開催 6月：(大宮南小) 8月：(大宮北保育所)
- ウ 「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
- 言語活用カリキュラムの積極的な活用を年間通じて進める。（学力充実部会、担任会）
- エ 保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小1スタートカリキュラムの自学園化
- (2) 人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の活用
- ア 人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
- (ア)全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成し、そのための授業づくりの推進（各教科指導で3つの力を育成する指導を充実させる。）
- (イ)特に、授業や特別活動等を通じて、「話し合い活動」の充実を図る。
- イ 人権意識を育成するための人権学習の充実
- (3) ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動の充実
- ア ICTを活用した効率的・効果的な連携教育活動・体験活動の充実
- イ 体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
- ウ 効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
- エ 丹後学・キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（小学4年生・中学3年生）の実施
- (4) 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働
- ア 学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保
- イ 担任会の充実
- (5) 家庭、地域社会への啓発、情報発信
- ア ホームページ、たより等を活用した情報発信
- イ 大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」PTA・保護者会の協働
- ウ 家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
- エ 大宮学園学校運営協議会での学園教育環境づくりの推進
- オ 「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2) 学園内の全ての学校園所が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3) 学園内の全ての学校園所が、学園の子どもの実態・課題、学園重点方針等を各校の経営計画へ位置づける。 (4) 学園保幼小中一貫教育推進部会による実践研究成果を各校に波及させる。	(1) 学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の2園所、3校での共通化して取り組んだ。 (2) 学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置づけ、経営の充実に取り組んだ。 (3) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4) 確かな学力の育成に係り、「安心安全な居場所づくり」の視点を加えて改編した「授業づくりの視点9」を基に、授業改善に取り組んだ。このこととあわせ、「自己調整力を育む授業」について具体的に示したうえで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の具体を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 大宮学園教育課程の編成 ア 汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・小学校5・6年での一部教科担任制 ・中学校授業体験（実技教科と5教科） イ I・II・III期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小1スタートカリキュラム（5歳児担任・小学1年生担任） ・夢・未来式の実施（小4年・中3年） ・学園ふりスタ（小学4年生・中学1年生） ・春季休業中の共通課題（小学6年生） ウ 家庭学習の充実 ・家庭学習の手引き ・家庭学習がんばり週（旬）間 (2) 学力充実向上に関する取組の進行管理 ア 学力調査と分析（各種調査の積極的活用） イ 学力向上のための授業充実・授業力向上 (3) 生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ア 小学校5・6年生の心得、共通の生活の決まり イ 情報モラル教室 ウ 保幼小中移行支援シート (4) モデルカリキュラムに係る推進 ア モデルカリキュラムの研修 イ モデルカリキュラムの年間指導計画への位置づけ	(1) 大宮学園教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗入れ授業（理科）を実施することで、児童の実態把握や指導に効果が見られた。 ・生徒支援加配（人権教育）が小学校での学習補助を行うことで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・授業や部活動体験の実施により、児童の入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②I期、II期、III期の学習への円滑な接続について ・園所と小学校との連携のもと、小1プロブレムの解消に向けての取組を行うことができた。今後も保幼小接続のためのアプローチプログラムと小1スタートカリキュラムの確実な実施に向けた取組を意識して行う。 ・小4と中3で、「夢・未来式」に取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり週（旬）間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 ④人権意識の育成、「人権教育カリキュラム」活用について ・人権・生指・特活部会の提起により、大宮学園独自の「人権教育カリキュラム」の整理や周知を図るとともに、各校で進められている「人権月間」等とカリキュラムを連動させ、人権学習をはじめ様々な取組を進めることができた。 ・各校が取り組んできた人権学習や人権教育の視点を持って取り組んできた各種行事等の積み重ねにより、「他者の役に立っている」と回答した割合が三小中学校ともに向上した。

		(2) 学力向上に関する取組の進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、「授業づくり」についての提起等、さらに具体化することができた。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中連携による指導研究に取り組んだ。担任会を通じて、「言語活用カリキュラムを活かした授業」「生徒指導を一体化した授業」「自己調整力を育む授業」の3つの視点に沿った授業研究を発達段階に応じて進めることができた。今後も普段の授業に位置づけ継続して取り組んでいく。 ③学園教育課程会議・学力充実部が中心となり、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業改善につなげることができた。また、学園として伴奏支援をもらいながら今年度取り組んだ「自己調整力を育む授業」をキーワードにした研究について、各校の日々の授業や系統性について交流することができた。さらには、本年度は大宮南小学校での授業研究会を通して、学園としての授業づくりについて協議し、授業改善の在り方について深めることができた。 ④改編した「授業づくりの視点9」を効果的な活用の観点や実態に合わせて見直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善への視点として整理することができた。 (3) 生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校PTAで情報モラル学習を実施し、SNSの安全な利用について学ぶことができた。 ②各校の実践や事例を交流する中で「生徒指導上の実践上の視点」の重要性を再確認することができ、今後も他分掌との協働的な活動の推進の必要性を確認できた。 (4) モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②今後もモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 連携・体験活動 ア 人権意見発表会（学校毎） イ 合唱祭の取組（小学校6年生へ配信） ウ 体育祭（招待状） エ 部活動体験（10月予定） オ 体験授業（6月予定） カ 花いっぱい運動（学校毎） (2) 幼児・児童・生徒交流活動 ア 児童会・生徒会交流活動	(1) 連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①幼保、幼保小、小小、小中、幼保中それぞれの連携事業が計画に沿って進めた。園所と中学校による体育祭交流や小中学校合同の挨拶運動（ハイタッチモーニング）、中学校部活動体験などが実施できた。今後も幼児児童生徒の連携事業を進める中で、効果的で必然性のある連携・交流に整理し、より学園としての一体感や将来の自立につながる事業の推進を図る。

	イ 挨拶運動「ハイタッチモーニング」 「にこにこの日」の取組 ウ 生徒会アドバイス（予定） (3) 教職員の交流と協働 ア 担任会（小小担任会、小1担任と5歳児担任、小6担任と中1担任） イ 授業研究に向けた取組の推進 ウ 合同研修会・実践交流会の実施	②各小中学校でICT活用が進められている。小中学校それぞれでの活用について今後も交流し、年々変化する情報モラル教育の充実とともに児童生徒がスムーズにスキルアップできるようにしていく必要がある。 ③オンラインによる会議や活動についても環境を整え、効果的な活用を図る。 (2) 教職員の交流と協働について ①学園の教職員が確実に出会い、話合う機会の確保を大切にし、年3回の担任会をはじめ、本年度は互助組合事業や懇親会等教職員の交流と協働を進めることができた。各会議や担任会の他、大宮北保育所での保育参観、大宮南小学校での授業研究会とその後の分散会、さらに、夏季全体研修会では大宮北保育所の参観と所長による講義と授業改善に係り伴奏支援をいただいている講師による講義などにより、園児の姿をとおして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、また「自己調整力を育む保育・教育」から幼保小中それぞれの発達段階における指導・支援等について学び合うことができた。 ②教職員アンケートから大宮学園の教職員の信頼・協働について肯定的な評価が高く、今後も効果的、計画的な研修・取組を工夫・継続していく。 ③3部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。 ④事務部会では共同学校事務室として協働が進められ、人材育成を含め大きな成果があった。 ⑤担任会を年間3回計画し、ミッションをもって取り組んだ。次年度以降も実のある取組にすることが必要である。 ⑥幼保小中教員等の交流は一定進んだが、勤務の関係により保育所・こども園の先生方との交流が物理的に難しい。
家庭、地域との連携、情報発信	(1) 家庭教育課題を踏まえた「大宮学園」PTA統一目標の策定 (2) 大宮学園PTA家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の取組 (3) 大宮学園PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画と実施 (4) 大宮学園学校運営協議会と連動した具体的取組（見守りと挨拶をセット） (5) 「大宮学園」学園評価の実施と家庭及び地域への啓発	(1) 大宮学園PTAの目標策定とともに、配布済の「令和版家庭の心得」を啓蒙することができた。 (2) 大宮学園PTA事業計画に基づき、「地域でおはよう挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計画的に実施することができた。今後も学園PTAの取組に保育所・こども園の保護者会をお誘いすることで連携を進めていく。 (3) 大宮学園学校運営協議会との協働を進め、見守りとセットの挨拶の取組を広く大宮地域に波及できるよう進めた。特にコーディネーターが中心となり、丁寧な連携が進められ、会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。地域との関係づくり、各取組への協働体制を築くことができています。 (4) 学園だより、ホームページの更新等で、各園所小中学校の取組や幼児児童生徒の姿が広く発信できた。

		(5) 学園評価を実施し、今後につながる評価をいただいた。 (6) 各関係団体との園所小中学校との連携した学びについて積極的に検討していく。
--	--	--

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。また、年度当初、大宮学園教育推進計画を策定するとともに各会議のミッションを明確にすることができ、回数に限りのある部会で取り組むことが明確になった。 (2) 経営会議の方針のもと運営会議が学園運営を行う中で、教育課程会議、各部会で一致した取組を進めるシステムが機能した。 (3) すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組を推進することができた。 (4) 授業づくりに関わり、「探究的な学びにつながる授業改善」「自己調整力を育む授業づくり」等を視点として明確にした授業研究会や公開を通して、幼児期から小中学校への接続やその意義、授業研究の一貫性等大きな学びがあった。 (5) 「心理的安全性」を視点に加えて改編した「授業づくりの視点9」に基づき、「自己調整力」「探究的な学び」についても具体的に示したことにより、学園として、また各校での授業づくりの研究が深まり、授業における工夫・改善などが大きく見られた。 (6) 小中学校の不登校である児童生徒や配慮や支援の必要な幼児を含めた子どもたちの状況を共通認識し、支援の在り方を探ることができた。 (7) 不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで、不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を図ることができた。 (8) 学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、教育支援部を中心として事例研究を通して不登校児童生徒の理解と支援について研究を深めることができた。 (9) 校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の学習の状況や欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。	◎令和7年度は、大宮学園保幼小中一貫教育11年を迎え、これまでの成果・課題の整理とともに組織や各取組の検証を進め、次の5年に向けた学園の方向性を構想する1年とする。 【課題】に対して (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ①市の教育課題改善のため、保幼小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に挙げる。 ②学びのパスポートや人権アンケート、各種質問紙から大宮学園幼児児童生徒の実態や共通課題を整理する。 ③学びの基盤につながる「心理的安全性」や居場所のある教室、自他を尊重する心の育成を目指した「話し合い活動」の充実と、園所小中学校における連続性・系統性のある人権意識向上を継続する。 ④その具現化に向け焦点化した大宮学園保幼小中一貫教育の重点策定を行う。 ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、「探究的な学びにつながる授業改善（授業づくり）」をはじめ、「今年度に引き続き「自己調整力を育む授業づくり」についての研究・実践をさらに推進する。 イ 人権意識の育成に向けて、「人権教育カリキュラム」を活用した人権教育を実施する。また、実施に向けた協議を大切にする。 ウ 「探究的な学びにつながる授業づくり」、「自己調整力の育成」に関わっても、ICTの積極的な活用を推進し、充実させる。 エ 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働を進める。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 ①教職員の保幼小中一貫教育の意識のさらなる向上と、学園としての指導の一貫性へのさらなるステップアップを図る。特に幼保からの接続について継続して意識を高める取組を進める。（他市町からの転入者や新規採用者等の増加に伴い丁寧な説明を行う必要がある。）

(10) 大宮学園学校運営協議会では、「あいさつ」を中心に実行ある取組が進められた。(見守りとセットのあいさつの取組) (11) 小中連携事業の他、小小連携、幼保連携も可能な内容で実施ができ、継続した取組にすることができた。 【課題】 (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点、教育指導・活動の充実をさらに図る。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子どもが毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねていく。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 (5) 大宮学園学校運営協議会(学園コミュニティ・スクール)との協働をさらに進め、より地域とともにある学園(学校)を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を検討する。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議等ができ、大きな成果につながっている。半面、担任会等回数限定している分、具体的な指導の継続性が難しく、検討が必要である。	②各校持ち回りも授業研究会については、来年度市全体の授業研究会との兼ね合いにより開催は検討するが、本学園の重点内容を進めることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための「探究的な学びの充実」につながる授業改善を目指していく。また、授業研究会を通して、「自己調整力」や「安心安全な居場所づくり」など、普段の授業で大切にすることを学園全体で確認し、幼児児童生徒の変容につながる継続した指導を行う。 ③これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「自己調整力の育成」等、今年度の研究・実践をさらに深める取組を行う。 ④年2回の全体会と夏季研修会や授業研究会等、今後も持続可能な研修・交流を計画し実施していく。 ⑤担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。 ⑥幼児児童生徒の交流や各園所小中学校の行事・取組等について、学園としての実施時期や内容等の検討・調整を丁寧に進める。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子どもが毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 ①児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。 ②教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。 (4) 教育支援が必要な幼児児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 ①幼保小連携事業・幼保中連携事業・小小連携事業・小中連携事業を通した担任会の充実を図る。 ②幼児の具体的な姿から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を教職員で共有し、幼保小の丁寧な接続を継続する。 (5) 大宮学園学校運営協議会(学園コミュニティ・スクール)との協働をさらに進め、より地域とともにある学園(学校)を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 ①大宮学園学校運営協議会の来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会で具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園(学校)を目指す。 ②PTA・保護者会の事業の一体化について今後も無理なく進める。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。
--	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

1 「目指す子ども像」、教育目標

【教育目標】

将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進

【目指す子ども像】

あ：明るく元気に進んで学ぶ子

【知】 意欲的に学習に取り組む子ども

み：みんななかよく支え合う子

【徳】 規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども

の：のびのび生き生きやりぬく子

【体】 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 確かな学力の育成

ア 主体的に学ぶ力とコミュニケーション能力の育成

(ア) 生徒指導の4つの視点を生かした「わかる」「できる」授業の実現

(イ) 指導と評価の充実（指導と評価の一体化）

(ウ) ICTの活用による授業改善 (エ) 「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂

イ 補充学習の充実

(ア) 基礎基本を定着させるための個別補充学習

ウ 家庭学習の充実

(ア) 授業とつながる自主的な家庭学習の実現 (イ) 家庭と連携した学習習慣の定着の取組

(ウ) 家庭学習の指標づくり

エ 学園として、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に取り組む。

(2) 規範意識の醸成

ア 学習規律の確立

イ 生活習慣の確立

(3) 豊かな人間性の育成

ア 自尊感情の醸成

イ コミュニケーション能力の育成

ウ 将来を展望する力の育成

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化 イ 学園内の全ての学校園所が、学園経営方針・目指す教師像の経営方針へ位置付け ウ 学園内の全ての学校園所が、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の各学校園所の経営方針へ位置付け	ア 経営会議で確認した学園の教育目標や経営方針は、各学校園所の経営方針とつながっているようにするとともに、各学校園所・各会議・各部会は年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げてきた。 イ 全教職員が一堂に会する第1回の研修会では、学園の経営方針の説明、推進会議担当校長より2年間の「非認知能力・認知能力を一体的にはぐくむ授業づくり」の研究の積み上げを共有し、今年度異動してきた教職員への理解を図った。また、学年部会や領域部会等を実施し、活動内容に必ず「網野学園で育成したい非認知能力」の実践や交流を入れることで具体的な取組につなげてきた。 ウ 学園評価アンケートによって課題を明らかにし、実践を振り返った。 エ 「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教育教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」を通して、各学校園所・各会議・各部会・学校運営協議会の取組を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア 不登校の未然防止に向けて ・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業と連携した取組 ・全ての幼児児童生徒にとって居場所となる魅力ある学校園所づくり	ア 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年度の3年目を迎え、田爪教授の講演や授業研究会での指導講評等を積み重ね、「非認知能力」について全体で共通理解を高めてきた。また、ギミック・ブラッシュアップシートを活用した保育や授

	・早期発見・早期対応（連続3日 月3日 毎日の把握 不登校の兆候を捉える） ・社会的自立を目指した取組 ・組織的な取組（ICTの活用 関係機関との連携、保護者の心の安定） イ 0期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の指導目標を踏まえた系統的な指導 ・「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂 ・学力向上システム・プログラムの見直しと活用 ・学力充実月間 ・家庭学習の手引きの活用・家庭学習がんばり週間の取組 ・小6授業体験 ・小6部活動体験 ・小6単元総括テスト ・小6学年末テスト・小6春季休業中の課題の見直し・実施 ・中1ふりかえり集中学習・小4ふりかえり学習 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ウ 落ち着いた環境をつくるための規範意識の醸成 ・学園で目指す「これだけは」の取組 ・生徒指導・教育相談に係る情報共有 ・小小連携授業、小中連携授業 ・アプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践、検証 ・長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践、検証 エ 思いやりを持ち仲間と共に生きる人間関係づくり ・生徒指導の4つの視点を生かした教育活動 ・ボランティア活動 ・あいさつ運動 ・Ⅰ期・Ⅲ期の区切りとなる取組（ととせの会 立志式）	業を実践した。 イ ギミックの実践は、幼児児童生徒の認知能力及び非認知能力をどの場面でどのように伸ばそうとするのかを具現化するものになってきた。保育・授業の中で育てたい力を意識する上で有効であり、認知能力と非認知能力を保育・授業の中で連続的、系統的に捉える意識につながっていた。ギミックという共通の実践でつながり学園及び各学校園所の研究を深めてきたことは、学園全体の組織的な取組として大きな成果である。 ウ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部会で共有し、スタートカリキュラム・アプローチプログラムの実践と検証を行ってきた。また、各園所の実態に合わせてカリキュラムを見直すことにつながった。 エ 小学校から中学校への円滑な接続を目指し、小6の部活動体験・合唱祭と体育祭の取組見学・中学校授業体験を行った。体験や見学は、生徒主体で活動する姿から得ることや実感できる大きな意義があり、中学校入学に対する不安解消と期待、部活動選択の一助、小学校生活での意識の変化につなげることができた。また、日常的に小中連携加配教員による授業を小5・小6対象に行っていることで、中学校と小学校の授業の変化の差を小さくして不安を軽減させ、学習に主体的に向かおうとする高まりが見られた。 オ 小6では、問題と解答を別にした算数の課題に取り組みせることで中学校のテスト形式に慣れさせ、中学校入学後の不安解消をねらってきた。 カ 小中合同でアルミ缶回収ボランティア活動に取り組み、児童生徒が網野学園の一員であることを意識することができた。また、中学生が小学校に来校し一緒に活動することで、小学生は中学生に憧れをもち、より身近に感じるすることができた。中学生には、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を明確する機会となった。 キ 小2・小4と中1～中3を対象に、篠原嘉一氏（NIT情報技術推進ネットワーク）を講師に招いて情報モラルの学習が実施し、SNSやゲーム等の使用におけるトラブルを知り、今後の使用について見直すきっかけとなった。また、同じ日にPTA・保護者会を対象として講演会を実施し、児童生徒が学んだ内容と連動させて話を聴くことは、家庭との連携を図る上で有効であった。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア 目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び交流 (ア) 教職員の合同研修会 (イ) 授業研究会、園所参観を通した研修会 (ウ) 学年部会を通した研修 イ 「自尊感情」と「コミュニケーション能力」の向上を目的とした交流事業 (ア) 小6合唱祭練習見学	ア 年間3回の全体研修会を実施し、全教職員で学び合ったり講演を聴いたりすることで非認知能力について理解を深め、共通認識を図ることができた。夏には全園所公開の保育研究会、秋には保幼小中一貫教育授業研究会を実施し、網野学園全教職員で事後研究会を行い、非認知能力育成のための保育・授業の研究協議を行い、理解と実践を高め合うことができた。 イ 5歳児交流会や特別支援学級友だち交流会を実施し、園所間や小中間の交流及び仲間を知ること

	(イ) 小6 体育祭取組見学 (ウ) 小6 部活動体験 (エ) 合同校外学習及び学びの交流 (オ) 小中合同交流事業（友だち交流会等） (カ) 小学校体験授業時の小1 との交流 (キ) 5 歳児交流会	ができた。また、学年部会や保幼小連携部会で教職員がつながり、取組方法や内容を確認し合ったり足並みを揃えたりしながら実践を重ねることができた。 ウ 生徒指導部会、教育相談部会、養護部会を開催し、児童生徒の実態等の共有を図ることができた。また、児童生徒の生活習慣や SNS との関連性の改善に向けて生徒指導部と養護部の連携ができた。
家庭、地域との連携、情報発信	ア 網野学園学校運営協議会の取組 (ア) 網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が目標や課題を共有・協議し、具体的な取組を推進して学園の教育環境づくりを進める。 (イ) 網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（P T A）園所（保護者会）、家庭、地域社会が連携・協働して取り組む。 イ 京丹後市 P T A 協議会網野小中一貫校 P T A の取組 (ア) 網野小中一貫校 P T A として、「学園合同あいさつ運動」等、一体となって取り組む。また、学園の「目指す子ども像」の実現に向け、保護者会とも連携して取り組む。 (イ) どの家庭でも、幼児期から大切に「これだけは！」（家庭編）の取組 ・ 基本的生活習慣の確立 ・ 規範意識の基礎の確立 ・ 家庭学習の習慣化 (ウ) 「子育て講演会（ゲーム・ネット講座）」については、主催は網野学園とし、運営は運営会議が行う。また、P T A 及び保護者会とも連携し進める。	ア 網野学園学校運営協議会を計画的に実施し、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学校づくりへの参画意識が一層高められた。 イ 「網野学園これだけは！」（家庭編）の配付と活用を通して、保護者に保幼小中一貫教育で大切にしている視点を知っていただき、協力を得てきた。 ウ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 エ 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業を活用し、京都ノートルダム女子大学高井教授に「幼児期に大切にしたい親子の関わり」について各園所においてオンラインによる講演をしていただき、保護者の学びの機会を設けることができた。 オ 網野学園あいさつ運動を学期1回設定し、保護者だけでなく関係団体や地域の方々と協力しながら、全ての学校園所で実施することができた。 カ 学校支援ボランティア等を活用して地域の方々の支援を得ることができ、網野町民にも教育活動に参加していただいた教育・保育活動を展開することができた。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
令和6年度網野学園経営及び進行管理について 成果 ア 経営会議を定期開催し、学園の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。また、事務局は、事務局会議を開催し、学園経営の進行管理を行った。 イ 学園経営の基本方針に基づく「重点的な取組内容」を具現化するため、経営会議はその統括を行い、各会議・部会を組織的に進めることができた。 ウ 経営会議で運営会議、推進会議、領域部会の取組の進捗状況の把握と成果・課題を掌握・整理し、調整や改善に努めた。 エ 事務局部長が経営会議に参加することで、学園の取組を把握して運営費の調整に活かす	3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価、4 今年度の成果と課題 改善方策を踏まえ、以下を令和7年度学園経営での改善方策とする。 (1) 組織体制及び運営上の改善 組織体制について ア 経営会議は、学園内の教育課題、各会議・部会等の実践の進捗を把握し、年間を通して課題を整理するとともに、課題の改善・解消につながる取組を提起し、学園教育目標達成を目指した学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決済を受けながら、実践の方向性や目指すゴールのイメージを明らかにして取組を計画的に進める。 イ 事務局は、会議を適時に開催し学園経営の円滑な進行管理に努める。また、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究成果を生かした新たな学園経営充実の進行管理に努める。

ことができた。

オ 全体研修会、授業研究会を計画通り実施することができた。

カ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが各園所・小学校を訪問し、各校の授業の様子や取組をたよりやHPを通して紹介し、各学校園所を繋ぐことができた。

キ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターは、網野学園学校運営協議会の事務局長を務め、地域学校協働本部地域コーディネーターと連携して保護者・地域の方々の学園運営への参画意識の高揚に努めた。

ク 小1を対象とした「まなびスタート調査」や学力充実部のたよりにおいては、研究推進加配を活用し実施することができた。

ケ 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究成果をもとに、さらに、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、学園として授業研究を進めていく。

引き続きの課題

ア 今年度の学園児童生徒アンケートの分析から、課題を明確にし、学園としての手立て、指導の方向性を明確にし、具体的な取組を進める。

イ 行動連携『どの家庭でも、幼児期から大切にする『「これだけは！！」(家庭編)』の中の、規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲーム・インターネット・SNSなどのルールを決める」を挙げている。しかし、網野学園生徒指導部のアンケート結果からも、大きな課題になっている。

ウ 学園評価アンケートから「自己肯定感」や「将来の夢や目標」をもつ児童生徒の割合が学年が上がるにつれ、減少する傾向にある。

【網野学園児童生徒アンケートより】

- ・児童生徒アンケート肯定率80%以上の項目数
 小1 (19⇒16 /19) 小2 (19⇒13 /19)
 小3 (13⇒17 /19) 小4 (16⇒14 /19)
 小5 (10⇒12 /20) 小6 (17⇒14 /20)
 中1 (13⇒12 /20) 中2 (15⇒9 /20)
 中3 (13⇒16 /20)
- ・肯定的な評価が高い項目
 学習面：「授業が分かる」「自分の考えをもつ」「考えを交流する」「人の話を聞く」
 生活面：「時間を守る」「きまりを守る」「友だちのよいところ見つけ」「いじめはいけない」「最後までやり遂げる」
- ・「学習意欲」「家庭学習」「自尊感情」「将来の夢や目標」に課題が見られる。

ウ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターは、各学校園所への訪問や各会議・部会に参加し、状況把握と内容整理、調整を図る。

運営上の改善について

ア 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を土台として、児童生徒が見方・考え方を働かせて何をどのように学ぶのか、学びの質を高めていく必要がある。そのためには、「確かな学力の育成」に向け、主体的・対話的で深く探究的に学ぶ授業づくりを研究し、実践を積み上げる。

イ 網野学園が研究実践を積み上げてきたギミック・ブラッシュアップシートを継続して活用し、各学校園所では保育・授業の質的改善に努める。なお、授業研究の重点教科は各校で決定し、研究を深める。

ウ 領域部会の運営に責任をもち、必要に応じて部会を開催する。

(2) 令和7年度の重点的課題・取組の方向性について

教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について

ア 網野学園として11年経った。10年を区切りに学園の目標や方針、重点的な取組内容等の見直しを今年度図る時期ではあったが、「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究を終えた今年度末を区切りとすることとしてきた。来年度より新たな経営方針の下、さらなる学園の高みを目指す。研究の効果の把握・検証を基にした新たな方針等を年度末研修会にて提案し、来年度当初に最終決定する。

イ 園所では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めていく。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から子どもたちの成長を連続的に捉え、園所と小学校との連携を一層進める。また、網野学園全教職員による園所参観及び事後研究会を通して、園所の教育・保育の理解をさらに進め、就学前から中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的かつ一貫した指導の継続につなげる。

確かな学力の育成について

ア 探究的な学びを充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した研究・実践を推進会議が中心となり進める。

イ 引き続き、認知能力と非認知能力を一体的に育む保育・授業を大切し、「網野学園で育成したい力」の育成を目指す。

ウ 教科指導と生徒指導（自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安心・安全な風土の醸成）を一体化させ、子ども主体の授業づくりを行う。

エ 目標と指導と評価を一体的に捉えた授業を行う。

オ グローバルな視野を養う保育・授業を充実させる。

カ 生きて働く「知識・技能」の習得と、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成に取り組む。

キ ICT等を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に進める。

ク 学習意欲の向上と自主的・自発的な学習習慣、自己調整力の向上を目指し、推進会議が中心となって各学

	校の実態や状況をつかみ、具体的な取組を進める。家庭学習については、保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指す。園所においても保護者の協力を得ながら、家庭学習がばんぱり週間を同一時期に実施する。 豊かな人間性・社会性の育成について ア 自尊感情の醸成と将来を展望できる力、豊かな人間性を育む場面、特別活動の充実を図る。 イ 仲間と関わり合いながら課題を解決する授業や活動を充実させる中で、他者をつながる力、コミュニケーション能力を育てる。 ウ 他者の考えに触れさせる場を意図的・計画的に仕組み、一面的な見方ではなく、多面的・多角的な見方ができる力を育てる。 エ きまり・ルールやモラルについて「話し合い活動」を取り入れ、主体的な活動を通して自ら考え、理解し、行動に移す能力を育てる。一方、情報モラルについては、小2、小4、中1～中3、網野学園保護者を対象にした講演会を運営会議が中心となり運営する。保護者対象の子育て講演会については主催を網野学園とし、PTA及び保護者会と連携して進める。また、社会的にゲームやインターネットの使用による健康被害（依存症）が問題になっていることも踏まえ、自己コントロールができる力を身に付けるため、生徒指導部と養護部が連携しながら系統的な取組を進める。 オ すべての幼児児童生徒を対象とした幼児発達支援と発達支持的生徒指導を大切にし、誰もが受け入れられる居場所づくりに努める。 カ 社会的自立に向けた丁寧なアセスメントと個に応じた支援を充実させるとともに、多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限りの確に把握し、切れ目のない組織的な支援を行う。 評価に基づく組織的な学園経営の推進について ア 学校評価・学園評価の結果に基づきながら学園経営を行う。 イ 教育評価・指導評価の結果に基づきながら教育実践の充実を追求する。 ウ 「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」結果から変容や課題を分析し、実態に即した学園の授業研究と各校での教育実践の充実・改善を図る。 (3) 令和7年度の年間計画・行事の見通しについて 全体研修会について ア 令和7年度は第1回研修会（5月2日）、第2回研修会（8月26日）、第3回研修会（2月18日）の年3回を節目としながら研究を深める。 イ 第2回全体研修会（夏季）については、網野学園小中学校全教職員で4園所参観及び事後研究会を行い、幼児の実態把握や指導実践について共有化を図る。また、網野学園教職員が学べる場として講師を招聘し研修を深める。 授業研究について ア 5校でローテーションを組み、年2回実施する。網野学園の授業研究テーマについて授業公開から学び合うこととする。
--	--

	令和7年度 橘小 網野南小 令和8年度 網野北小 網野中 令和9年度 島津小 橘小 ・時期は、前年度末に対象校間で決定する。 ・自校の実態に応じて時期（秋または年度末）と公開学級を決める。 ・授業研究会の運営（事後研等含む）は推進会議が行う。 ・公開時には、ギミック・ブラッシュアップシートと指導案を準備する。 イ 各校の授業研究会の案内を送付し、可能な限り参観を行う。 学年部会・領域部会について ア 学年部会については、年4回実施する。（5月・6月・9月・1月）授業日における開始時刻は午後4時からとする。 イ 学年部会に合わせて幼児部会も同日に会議を設定する。 ウ 「網野学園で育成したい力」を基に交流及び実践を進める。 エ 小5と小6部会は、担任と中学教員（専科・連携加配）で構成する。 オ 小6部会は、小中連携加配を活用し、単元総括テストを作成することで授業改善を図る。 カ 小4部会は、ふりかえり学習の取組を進める。 キ 必要に応じて学年部会を臨時で開催する。 ク 幼児部会、小1部会、保幼小連携部会は、長期モデルプラン、アプローチプログラム、スタートカリキュラムを実践し検証・見直しを行う。また、架け橋プログラムの検討を進める。 ケ 領域部会は必要に応じて随時開催する。
--	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 丹後学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

- ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】
 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】
 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ①学力向上につながる授業づくりの研究と実践を推進する。(目標と指導と評価の一本化を目指した『授業改善の10のチェックリスト』を活用した探究的な学びを追究する授業改善と学習への主体性を高める実践。そのため、研究推進に係る教科指定はあえて設定しない。)
 ②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性、一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保幼小接続に係わる事業・小小連携合同事業と3つの事業の充実を目指す。(幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿についての研究・実践)
 ③丹後学園の取組や事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①全体研修会、授業を通した研修会(3回)、各部会よりの課題提起、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。 ②各期の指導のポイントを設定し、子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。	○各校で、年度当初に「生活のきまり」を使って、学校生活のルールやマナーについて指導することができた。タブレット指導やタブレット点検を通して、正しくICTを活用できるための指導をすることができた。校区一斉あいさつ運動の取組を通して、生徒の挨拶に対する意識向上につながることができた。 ○不登校や不登校傾向、教育相談課題のある児童生徒の交流をし、丹後学園として情報共有ができた。実態交流だけでなく、家庭環境などの背景や要因、支援のあり方なども探ることができた。また、児童生徒の気になる様子等について、必要に応じてこまめに小中学校で情報共有を図ることができた。不登校児童生徒の未然防止や早期対応の取組を交流し、自校の取組の参考にできた。 ○中学校入学後の様子を参観交流することによって、支援の在り方等を検証し、教育相談活動に活かすことができた。 ○2学期末に、6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の円滑な接続が組織としてできた。小学校においては、児童の様子や課題などの情報の提供ができた。中学校においては、12月頭に参観懇談をすることで、余裕をもって各学校の児童の雰囲気、児童の実態や課題などを把握することができ入学後の見通しがもてた。 ○スクールカウンセラーの勤務日に部会を設定したことで、部会に参加してもらうことができた。さらに、専門的なアドバイスをもとに児童の心の安定を図ることができた。児童生徒の内面理解につながった。事例研究は不登校の中学1年生の事例から、小学校児童の様子についても交流することで、不登校児童生徒や別室登校児童生徒の対応について学びあうことができた。 ○小学校在籍中15日以上欠席があるなど気になる児童の個別記録を中学校に持ち上がり、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中

		学校に接続する予定である。(3月末) △各校共通の「生活のきまり」について、2小学校、1中学校の「生活のきまり」についての内容を協議し、実施することはできず、各校それぞれの実施になってしまった。 △定期的に部会を開き、各校の生指事象の交流や研修についての協議などができなかった。改訂された生徒指導提要の視点を入れた指導の交流により、研修にもなるため、次年度は各学期に部会を設定していきたい。また、センターファイルサーバなどを活用し、共通ファイルに入力するなど、担当者が集まって部会が持てなくても定期的な情報交流ができるようにしていきたい。 △昨年度、作成した「丹後学園情報モラル指導モデルカリキュラム」については、学園の生徒指導から各校、各教員への周知が広がらず、系統的ではなく部分的な指導になってしまった。令和4年度の部会で作成された「モデルカリキュラム」を活用した授業研究をしていくなどの案もあったが、実施できなかった。次年度は、年度当初に年間計画とともにこのモデルカリキュラムを学園全体に提案し、各学年で実際に活用してもらえるようにする。 △来年度の学園生指部会として、学期に1度は部会を持ち、情報交流や事業実施に向けた協議などをする。集まることが難しい場合は、オンラインにするなど部会の形式を工夫していく。また、生徒指導提要の視点を全体に広げ、生徒指導部の方向性を丹後学園の全教員に広げ、実際に教員が動きやすいものにし、生徒の変容が見られるよう実働的な取組にしていく。 △6年生の参観懇談に、組織としてより多くの先生に参加してもらえると良い。 △研修会で得た知識が、各小中学校の教職員に幅広く熟知させることができなかった。 △SSW の研修を実施できなかった。来年度は小中学校の来校日に合わせて設定するなど工夫し、児童生徒の家庭への支援について専門的な立場からアドバイスをいただき指導に活かしたい。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①2小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。 【2小学校合同事業】 ②総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。 ③『子どもの主体的な学びの変容』を重点とし、『主体的・対話的な深い学び』を意識した授業改善を行う。授業改善の10のチェックリストの活用。	○授業づくりの重点やチェックリストを作成し、学園、各校の研修会で確認することで、一人ひとりの先生方が意識をして自らの授業を振り返ることができ、授業改善につながった。 ○小4～中3までの学力・学習状況(の変容)を把握できる「京都市学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)の分析を行い、児童生徒の学力実態と非認知能力の実態、その変容について共有することができた。 ○昨年度の課題点を参考に、参観や協議のポイントを明確にして授業研究会を行ったことにより、事後研究会においても焦点を絞って議論を深めることができた。また、参観した授業からヒントを得て自身の授業づくりを行う先生もあり、その広がりが見られた。 ○こども園での主体的な活動の様子、学校での授業を互いに参観し、学び合うことができた。また、夏季全体研修会で園児たちがどのような場面で主体的になっているかを共有することができて、小中学校の教員にとっても主体的な学びについてのよき研修となった。(学校園所連携) ○家庭でも生徒の主体的な学びを進めるために、「家庭学習頑張り週間」について、児童生徒がめあてや教科、実施時間などを計画し、振り返りができるように記入の仕方を工夫することができた。子

		どもたちの感想の中で前向きなコメントが見られ、保護者からも子どもたちが自分の決めたことを頑張っていた旨のコメントがあった。 △学園で学力・学習状況の交流を行うことができたが、学園として長く続いている学力課題に対して、どのように各校、教員が解決に向けた実践をすればよいのか、授業づくりの重点やチェックリストを軸に焦点化し、具体的な方策を立てたが、その成果を検証するには至っていない。 △ICT の効果的な活用については、各校や個々の教員で創意工夫をしたが、教育課程部会としては具体的に方向性を打ち出し、各校に提案することができなかった。来年度はより一層クラウド等を活用した授業を推進するために、各校で積極的に使用し、その様子を交流していきたい。 □「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果（質問紙調査）を踏まえ、確かな学力を育成するために、学園全体で授業改善を確実に進めていく。また、本学園では質問調査の「計画性」や「目標を決めて物事に取り組むことができる」のポイントが低い傾向にあり、自己調整力や粘り強さを身に付けさせるための研究を進めていく。 □家庭学習の在り方について検討し、ICT を活用し、授業での学習と連動した家庭学習に自主的に取り組むことができるよう研究を深める。 □ICT の活用方法についての研究を進め、クラウドの活用方法等、各校での研究を学園内で広げる。 □学園の学力課題について分析し、10 年間を見通した学習習慣の定着、学力向上のための方策を検討する。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①年 3 回の全体研修会・授業研究会を実施するとともに、保幼小接続部会や期別部会・学年部会を開催し、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組を実践する。 ②中学校 1 年生入学後 1 カ月ごろの状況及び出口となる中学校 3 年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。 【小中合同事業】 ③教職員間…学年部会での授業研究会 保幼小接続部会でのスタート研修会【保幼小接続に係わる事業】 ④保幼小の子ども…5 歳児と小 1 年生との交流会（2 回）、遊びと交流 保幼小の教職員…5 歳児と小 1 担任の夏季研修会 ⑤保幼連携…4. 5 歳児の交流活動	○年度当初に 1 年生の授業参観を実施することで、入学した児童の様子について保育園で共有することができた。また、授業参観と同日にスタート研修会を設定することで、今年度入学した児童の姿をもとに、より良い接続の仕方について協議することができた。 ○スタート研修会で、スタートカリキュラムの活用について交流することで、入学児童に必要な対応について、具体的に考えることができた。 ○保育参観でこども園の取組を知ることで、幼児期の教育の基本的な考え方や保育園の接続の在り方について具体的にイメージをもつことができた。また、子どもの主体性を育てる指導の参考にもなった。 ○なかよし交流会においては、遊びだけでなく、生活科に係る活動を取り入れることで、丹後こども園、宇川小学校、丹後小学校の交流を深めることにつながった。 ○保幼小連絡会等で入学前に小学校に伝えたことが指導に生かされ、保幼で大切にしてきた子どもの関わり方が引き継がれていた。5 月の保幼小連絡会も保幼から入学後の助言があり、小学校の指導に生かされた。 △次年度のなかよし交流会については、引き継ぎ内容を確認後、実施年度の子どもの状況により活動内容等を考えていきたい。 △これまで、なかよし交流会では、2 つの小学校とこども園、宇川保育所の 4 グループをもとに役割分担等を考えてきたが、児童数等の変化により、活動の仕方も見直していく必要が出てきてい

		る。
家庭、地域との連携、情報発信	①「丹後学園学校運営協議会」の機能化と充実を図る。(年間2回の総会) ②「丹後学園だより」等を発行し、保護者や地域に配付する。各校のホームページにて、取組の状況を発信するように計画する。	○小中一貫校PTAと市教育委員会とともに教育講演会を開催し、家庭や地域での非認知能力の育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。更に今年度は研究協議の時間を取り、児童生徒のための熟議の時間を持つことができた。 ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会委員、町内民生児童委員、主任児童委員、保護司、各種団体の方々に保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ○各校ホームページや学園だより等で、教職員や児童生徒、保護者に広く広報することができた。 △保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 □次年度も、2学期に予定している教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 経営及び進行管理について ○今年度の経営方針や計画について、ほぼ予定どおりに進めることができた。また、丹後学園学校運営協議会の委員や民生児童委員の方々には、挨拶運動や授業や体験活動等の参観をととして、小中の連携や子どもたちの実態を見ていただく良い機会となった。 ○今年度より、教科の枠を取り払い、ねらいを明確にした授業研究会が実施できた。丹後小学校では、安心できる学習環境が整えられた中で、自己決定を大切にされた深まりのある授業が展開された。宇川小学校でも個々の学力状況を把握しながら小規模の良さを生かした丁寧な授業が進められていた。丹後中学校では、小学校と中学校では学習内容、ボリュームなど多くの違いがあることを共有し、互いが学び合い、スムーズな接続を図ることの重要性が再認識されたが、中学校段階においても小学校と変わらずわかりたい、教えたいという気持ちが主体性を高めることに繋がることが確認できる授業であった。 ○経営会議の前に実施し、各会議、部会等の実践状況や学園内の教育課題を把握し、教育目標の達成に向け経営会議等の調整・事務作業を行う事で経営会議がスムーズに運営できた。 2 保幼小中一貫教育の基本方針4点を見据えて (1) 丹後学園の目指す子ども像の共有 ○小学校・中学校からの課題提起を受け、学園全体で課題を共有し、課題解決に向けた動きや取組を各部で進める上で意識を高めることができた。 ○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、生きる力の育成につながる指導ができた。	●経営会議を受けて、4部会が見通しをもって上手く機能するように更なる連携を目指す。 《事務局会議（代表・庶務・学園コーディネーター）》

(2) 就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導 ○年間を通しての保幼合同での様々な取組や「丹後こども園・宇川保育所合同での1年生と5歳児のなかよし交流」「中学校授業体験」「中学校部活動体験」「小学校合同校外学習」等、効果的に進めることができた。 (3) 子ども、教職員の交流と協働 ○本年度の夏季研修会では、午前中はこども園参観、午後はこども園の実践発表から多くのヒントを得ることができた。また、その後は分散会をもち、今までの実践を振り返ったり、今後の指導構想などを交流する良い機会となった。 ○小小合同行事、「中学校部活動体験」、「中学校授業体験」、「ふれあい交流会」等は中学校生活への不安を解消する良い機会になった。 (4) 学園での豊かな環境づくり ○小中一貫校PTAと市教育委員会とともにSNS講演会、教育講演会を開催し、スマホやネットに潜む危険から身を守る方法や家庭や地域での主体的に取り組む子どもの育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。 3 学園評価の結果から (別紙参照) (1) 児童生徒アンケートから 【学習面】 ○学園の「授業づくりの重点」に沿って、特に「探究的な学び」を充実させ、「子どもたちが主体的に学ぶ授業づくり」を各校で推進したことで、授業改善が進み、「生活や授業で自分の思いや考えを表現する」項目で一定の成果が見られた。 【生活面】 ○今年度、学園として家庭学習の時間を設定せずに「家庭学習ががんばり週間」等に取り組んだ。その結果、「自分で家庭学習の内容や時間を決めて進んで取り組む」という点で成果があった学年もあった。今後も授業と家庭学習とを連動させ「自ら学習を調整する力」を育成したい。 ○学校のきまりを守るという規範意識やものごとを最後までやり遂げようとする意識が高い。 【その他】 ○「R6 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～授業改善の進捗状況を評価する質問項目(丹後学園)」を参考に、認知能力と非認知能力を一体的に育むという視点で、児童・生徒の変容を捉えながら授業改善等を進めていきたい。 (2) 教職員アンケートから ○12項目中9項目について、「十分にできた」「だいたいできた」の回答が昨年度より増加している。学園全体や各校で意識して取組が行われている状況が見られる。 ○平均約85%が「十分にできた」「だいたいできた」の回答であり、過去3年間より高い割合となった。各先生方が、目的を意識して努力されている結果だととらえることができる。 (3) 関係者アンケートと保護者アンケート ○4項目全てが、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の肯定的な回答が85%以上になった。関係者・保護者が肯定的な回答をして	●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、各期でつけるべき力を指導の柱にして、実践や研究を深めていく必要がある。 ●育てたい力が、ついたかどうかを検証し、それに対しての改善策を検討していく必要がある。 ●分散会等では、協議内容の精選、内容を検討し、限られた時間の中で効率よく進める事等を更に推進していく事が大切である。 ●講演会への保護者の出席者が少なかった。呼びかけを考えていくとともに、保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 ※次年度も、SNS講演会、教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける ●小学校での外国語活動から外国語の学習、中学校での英語の学習へと系統的に、かつより丁寧に進めていく必要がある。 ●「学校は楽しい」と感じている児童生徒の割合は高いが、「あまり楽しくない」「楽しくない」と感じている児童・生徒へ目を向け、丁寧なアセスメントを行う必要がある。また、生徒指導の実践上の4つの視点(自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成)を生かし、教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを充実させることを大切にしたい。そうすることで、「自分にはよいところがある」といった自己肯定感も高まっていくのではないかな。 ●「不登校を作らない指導」については、昨年度・一昨年度と比較して「十分にできた」「だいたいできた」の割合が下がった。不登校の要因が複雑化してきていることからなかなかこれといった指導が見いだせないと感じている教員も多いと考えられる。まずは、居心地の良い集団をつくることを目指すことやこどもに寄り添う指導と情報の共有等が必要である。また、「わからない」の回答も18%あるため、不登校の対応や未然防止に関する研修を行い、組織としての対応が必要である。 ●「粘り強く挑戦できる指導」についても課題が見られた。こどもが主体的に考え活動し、魅力的だと感じるための授業改善の中に、粘り強さを
---	--

いる。 ○令和6年度は、令和5年度と比べると、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の肯定的な回答が、3項目において増加し、1項目は昨年度と同じであった。増加した3項目の中で一番多い項目は11%増加した。 ○今後も保幼小中一貫教育のねらいや目指す姿等を、年度当初に各校で啓発し、その後も定期的に取組を発信し保護者や地域の理解を深めていく。	追求できる内容を組み込んでいけるよう、今後も授業研究や学び合いを行っていく必要がある。また、行事等の精選により粘り強く取り組んでいく内容が薄れている可能性もある。来年度以降、粘り強さという部分を意識した取組内容を考えていく必要がある。 ●回答者数が、保護者アンケートは、令和5年度の61名に対して、令和6年度は38名と減少した。中学校においては、前年度より半分程度の回答になった。 ●アンケートのForms回答は、特に保護者の回答率に課題があるため、幅広く周知してご協力いただけるよう工夫していく。
---	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

1 教育目標
【ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで自他を大切に、たくましく生き抜く子どもの育成】
2 目指す子ども像
(1) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む
(2) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間を大切に、ともに知恵を絞る
(3) 心身をきたえ、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

1 重点課題
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上（他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて）
(2) 自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の実践上の視点を生かした多様な教育活動の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己調整力、自己有用感、上級生への憧憬、下級生を包み込む姿勢
(3) 校種間連携の充実を図り、中学校卒業時の生徒の姿を共有した力の育成
・コミュニケーション力、社会性、自己理解、学びの連続性、教職員研修
2 取組みの柱
<u>研究主題</u>
自ら課題を見つけ、他者とのつながりを通して、主体的に課題解決に向かおうとする力の育成
(1) コミュニケーション力の向上、授業改善、探究的な学び
ア コミュニケーション能力の向上、互いにつながる力、探究する力の育成を図り、グローバル人材の育成を目指す。
イ モデルカリキュラム、丹後学をもとに、10年間を通して教育課程編成を行う。
ウ 授業公開、事後研を実施し、学力の定着と指導力の向上を図る。（授業研究会）
エ 園小、小中の円滑な接続・学びの連続性が担保できるよう期別部会を充実させる。
オ ICTを効果的なツールとして活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。
(2) 交流・連携の取組み（園小・小中の交流活動、小学生の中学体験授業）
(3) 地域人材、外部機関等の効果的な活用並びに発掘を行い、多様な人や異なる文化からの学びを通して、自己の視野を広げる。
(4) 学園内のいじめ、不登校、ネットトラブル等の未然防止と解消に向けた取組み
(5) 積極的な情報公開や戦略的な情報発信・広報活動（HP等により地域へ発信）
(6) 関係機関、地域（人材・施設などを含む）との連携（弥栄学園運営協議会との連携）
(7) 授業力の向上と教育課題解決のための研修会の開催（研修会、研究協議）

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	1 弥栄学園の組織の機能化 (1) 経営会議、運営会議、教育課程会議との各部の連携 ○経営会議 12回開催 ○運営会議 9回 ○教育課程会議 8回 (2) 各会議、各部の中での各校の交流と分析、指導方針の確認	(1) 組織運営について ア 本年度学園組織の改編を行っての運営・活動であり、各会議・部会の機能的な動きでは課題があったが、学園内の課題に解決・改善に向けた活動を進める事ができた。 イ 学校適正配置後の弥栄学園として保幼小中一貫教育の方向性、目標の具現化に向けて、より機能的、有機的な学園組織の整理に向けての議論を進める事ができた。 ウ 経営会議、運営会議、教育課程会議の3会議

	○生徒指導・特別活動部会 ○教育相談・特別支援部会 ○養護部会 ○事務部会 (3) 全体研修会で子どもの実態や分析結果、指導方針の共有 ○第1回全体研修会 5/2 会場：弥栄小学校 ○第2回全体研修会 8/22 会場：弥栄小学校 ○第3回全体研修会 2/18 会場：弥栄中学校	が定期的に会議を行い、事前調整・運営を進めることができた。更に各会議の役割、任務について整理する必要がある。 (2) 各活動における交流 ア 1園1小1中の特色を生かすためにそれぞれの会議、部会が試行錯誤しながら活動し、10年間を見通した一貫性のある指導のための協議・交流を行った。各校園の指導や校風等を理解して互いに学び合い尊重する機会となり、次年度の組織の再編成に向けて一定の整理が進んだ。 イ 学校数の減少により、各会議、各部構成や編成が変わる中、接続期に係る部会や学園全体に係る部会については、方向性を共有しながら各種活動に取り組むことができた。しかし、部会によっては活動内容等が不明確であり、十分に機能できない部会もあった。 (3) 全体研修会 3回の全体研修会を開催し、学園の方針、教育目標、重点課題、取組みについて、学園全体での共通認識を深めることができた。また、夏季全体研修会では、こども園の教育・保育について学園全体で学ぶ機会となり有意義であった。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 (1) 個別最適な学びに繋がる家庭学習の習慣化に向けて ○家庭学習がんばり週間 (2) 円滑な接続に向けて ○園小接続期における接続プログラムの効果的な活用 (3) 一貫した授業づくりの推進 ○授業改善で目指す子どもの姿の共有	(1) 家庭学習がんばり週間 弥栄学園全体の取組みとして、家庭学習の取組みを中学校の期末テスト期間に合わせて年2回実施した。こども園では、家庭と連携して読み聞かせの依頼など自ら学びに向かう素地の育成を図った。また、小学校・中学校では、家庭学習の充実と自己調整力・自己決定力の育成を図る為に、昨年までとやり方を変え、自分で学習の開始時刻の決定など主体的に学習に取り組む等の変容が見られた。 (2) 保幼小接続プログラムの実践 0期からI期のスムーズな接続に向け、0期I期前半部会（園小接続部会）においてスタートカリキュラムの見直しを行った。夏季全体研修会時に、小中学校の全ての教員によるこども園参観での教育・保育からの学びを接続期の効果的な指導・支援に生かしていく。 (3) 学びのパスポートの分析と効果的な活用 府の学びのパスポートのデータ・質問紙分析から得られた各校の学力実態、非認知能力との相関関係などの分析を通して、学園としての課題改善に向けての手立て、教育課程の工夫など令和7年度に向けて研究を進める。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	3 教育活動の連続性・協働性 (1) 授業研究会の取組み ○授業公開 弥栄小 5/2 ○授業公開 弥栄こども園 8/22 ○研究授業 弥栄小 11/27 3年 算数 ○授業公開 弥栄中 2/18 (2) 弥栄学園こども園小中連携 ○園小交流活動 9/5～10/22 まで ○小学校弥栄中体育祭練習見学 9/24 ○こども園弥栄中体育祭練習見学 9/24 ○中学校授業体験 9/2（体育・美術）	(1) 授業公開・授業研究会 今年度は小学校の適正配置後の児童の様子や弥栄こども園の教育・保育について学園の教員が集まり、発達段階を踏まえた指導方法や学習形態等の工夫について共通認識を図ることができた。授業研究会については、11月27日に弥栄小学校で実施し、研究主題に応じた授業展開について研究協議を進めることができた。 (2) 弥栄学園異年齢連携活動 ア 園小接続プログラムに基づいて、園児・児童の発達段階・実態に応じた交流行事を計画した。こども園、小学校との交流活動では、週2回隣接する小学校とこども園の門を開放し、1年生との交流を実施した。 イ 弥栄中学校の体育祭の練習の様子をこども

	○部活動体験 10/30 ○園小合同交流会 10/22 ○ふれあい交流会 12/3 (3) 情報モラル教育に向けた取り組み ○情報モラル教室 12/2 ・篠原嘉一 様 (NITネットワーク取締役) ○情報モラルアンケート ・インターネットの利用に関するアンケート実施	園5歳児、小学校6年生児童が見学した。小学生にとっては、中学生の活動の様子からリーダー性について学ぶ良い機会となった。 ウ 部活動体験では、小学6年生児童が中学生黄龍することにより、中学校に向けての不安(特に人間関係)が軽減され、入学への期待を高めるものとなった。中学生にとっても、自尊感情、自己有用感を感じられる取り組みになった。 エ 今年度の中学校授業体験は、実技教科(体育・美術)を選択性で実施した。中学校教員による授業を受けることで、学習に対する不安の軽減にもつながり、入学への期待を高めるものとなった。 (3) 情報モラル教育に向けた取り組み ア 情報モラル研修会 オンラインゲームやSNS等に関する知識・理解が深まり、ネット上での様々な問題点を知る機会となった。また、民生委員様や学校運営協議会の委員の方も、小中学校の授業を参観していただき、地域の方とも課題意識を共有することができた。本年度初めて実施した弥栄学園PTA家庭教育委員会主催の保護者向けの研修会では、こども園から中学校までの保護者が参加し、意義ある講演会となった。増加傾向にあるネットトラブルの予防、低年齢化への対応を図る為にも、PTAや関係団体との連携をすすめていきたい。 イ 情報モラルアンケートの実施 アンケート結果から、各校・学年の特徴的な課題や傾向をつかむことができた。結果については、校内だけでなく、学級懇談会等で保護者にも伝え、学校と家庭が課題を共有できた。また、今後も児童生徒の実態を把握するためにアンケートを継続実施し、意識や実態の変容について分析等を行い、学園・学校としての今後の指導につなげていきたい。
家庭、地域との連携、情報発信	4 家庭、地域との連携・情報発信 (1) 弥栄学園学校運営協議会との地域連携・教育環境づくりを進める。 (2) 弥栄学園便り等による広報活動を積極的に行う。 (3) 学校行事等において学校支援ボランティアを積極的に活用することを通して交流を深める。	(1) 学校運営協議会との連携 弥栄学園学校運営協議会の活動が5年目となった。学園の取り組み等へ熱心に参観していただき、貴重な意見や励まし、評価を頂くことができた。学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に運営協議会と学園PTAと連携した活動にも取り組んでいきたい。 (2) 広報活動 こども園、各学校のたよりやホームページ、保幼小中一貫コーディネーターの学園だよりの配布等を通して弥栄学園学校運営協議会の取り組みや学園の活動について広報・啓発をした。 (3) 学校支援ボランティアの活用 地域のボランティアの方々に、こども園や各学校の教育活動や交流事業に多くの支援を頂くことができた。子どもたちと地域の方々との交流や学園に対する理解が深まり、学園・家庭・地域の「横の連携」を深めることができた。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 弥栄学園経営及び進行管理 本年度の組織改編により、各組織の運営、事業の実施時期など調整等が円滑に進まず、不十分であった。また、新しい学園組織体制における課題や役割・任務についての課題点も明らかとなった。経営会議の計画的な進行管理により、組織的・機能的な学園経営を行う必要がある。 2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 本年度の「家庭学習がんばり週間」は、こども園も取り組むことにより、学園一体として進める取り組みとなった。今後は、より学園としての取り組みのねらいを明確にし、家庭学習の在り方の研究を更に進める必要がある。コミュニケーション力の向上と合わせて、児童・生徒同士の「教え合い」「学び合い」更には、系統的に「主体的に学習に向う」「自ら学習に取り組む」姿を目指した研究・実践を更に深化させていく必要がある。 3 教育活動の連続性・一貫性・協働性 学園規模や立地条件等から本学園の交流連携活動は教育活動の連続性・一貫性・協働性を担保するものである。本年度は、取り組みや行事だけでなく、立地条件をいかした日常的な交流をすすめることもできた。不登校への取り組みとして、経営会議での情報共有、教育相談部会での事例研究、接続期の学年の授業参観等の実態把握を行った。小規模の学園のよさをいかし組織として小中共通の引継ぎ資料の作成に取り組むだけでなく、日常的な連携を継続していく。 4 家庭、地域との連携・情報発信 こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校園の取り組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だより（保護者、地域向け）や学園ホームページでも情報発信し、学園の動きを地域に広報した。また、学園のリーフレットを、保護者や学校運営協議会等、関係諸団体にも配布して学園の活動を紹介し、弥栄学園の活動について啓発を行うだけでなく、行事等の案内を配布し、学校園に来ていただき子どもの姿をみていただくことを大切にできた。	1 学校適正配置による1園1小1中体制での組織運営に係る令和6年度評価を踏まえ、経営会議が主体となって現組織の再編成を行い、運営・活動内容等について調整を行う。 2 こども園から中学校への系統的で一貫性のある指導・支援を計画的に進め、10年間で育みたい力、本学園の課題の克服、探究的な学びへつながる授業改善に向けた研究・実践を関係部会を中心に推進していく。特に自ら学習を調整する力の育成を目指し、ICT・クラウドを活用した授業改善、授業と連動させた家庭学習について更に研究していく。 3 中学校卒業時（第Ⅲ期）の「生徒の姿」を全教職員で共有した上で、継続的な実態把握と評価に基づいた弥栄学園の教育活動、事業における成果・課題を明確にし、保幼小中一貫教育の教育内容の充実を図っていく。次年度から、教育相談・特別支援部会にこども園からも入っていただき、10年間を見通した支援の継続と丁寧なアセスメントを組織として行っていく。 4 今後も弥栄学園の活動について、広く情報発信を行うだけでなく、実際に子どもの様子をみてもらうことを通して、保幼小中一貫教育への理解と協力を得るとともに「地域とともにある学園」を目指し、連携・協働を進めていく。

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 久美浜学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

[教育目標] 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 [目指す子ども像] (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 中期的な展望(取組の見通し)

年度	教職員の意識	学力	ギャップ(不登校)
R3 (6年次)	・新学習指導要領への対応 ・学力向上の方策を全職員で検討	学力向上試案の策定 (教育課程会議)	接続期の校種間連携充実 事例研の継続
R4 (7年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践 新学習指導要領で求められている資 質・能力の育成	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	学校に起因する不登 校人数の減少 事例研の継続
R5 (8年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	早期対応、情報共有 の徹底(全職員の共 有)
R6 (9年次)	↓	府・全国学力テスト・調査全 学年平均以上(学園)	↓
R7 (10年次)	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続 した取組の整理とまとめ 次の10年を見通し新たな取組の構築	府・全国学力テスト・調 査全学年平均以上(全 学校)	早期対応、情報共有 の徹底(全職員の共 有)

(2) 重点目標

「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

(3) 指導の重点

『学力向上』①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) ③家庭学習時間の確保

(4) 取組の柱 ① ② ③ ④

ア 10年間(就学前から中学校卒業まで)の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上 ① (ア) 久美浜学園全教職員がチームとしてみんなでやるという協働「教職員の協働」意識を醸成。「教職員の協働」と「対話と理解」の推進 (イ) 目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を実現する。 ・学園テーマを「主体的に学ぶ力の伸長」とし、すべての教職員で幼児児童生徒が自ら主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を推進する。 ・認知能力、非認知能力の一体的伸長を図る具体的な取組を進める。 ・「リーディングDX事業」の先進事例をもとに、ICT活用を軸とした授業研究を進める。 イ 各校園所における規範意識の醸成を基盤と ②落ち着いた学校(園)づくり、授業づくり (ア) 生徒指導の4つの視点(自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成)を生かした授業づくりと学級経営・特別活動の充実により、規範意識を醸成し学ぶ意欲を育てる。 (イ) 基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付け、互いに認め合い、励まし合い、支え合える雰囲気作りを進める。 ウ 子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による ③行動連携強化 (ア) 共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事・授業 (イ) 豊かな教科指導を目指す指導交流(保幼小連携、小小連携、小中連携) エ 保護者、地域とともに ④「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組を進める。 (ア) PTA・保護者会、学校運営協議会、地域学校協働本部事業の推進と充実 (イ) 家庭学習時間の確保に向けた連携
--

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有 ① ② ③	(1) 経営会議を中心に組織的且つ丁寧に、実態や課題、目標、方針等の共通理解を図る。 ア 年度当初の学園全体会での提起と全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ 夏季全体研修会、公開授業、園所参観、分散会の取組を通じて教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 : R7 2/18 (2) 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、PDCAで改善を図りながら共通理解を深める。	○久美浜学園7校園所が1つの目標に向かう中で、ICT活用や取組の工夫を行い、教職員及び児童生徒園児の交流を実施し、「理解と対話」の継続を図り目標や方針等を共有 ①2/18 (年度末全体会での全体協議他) ○②園所参観とその後の交流会を実施することができ、10の姿を見通した保育・教育の在り方を学んだ。 ○③2つの公開授業、分散会を実施し、授業研究を進め深めることができた。 ○連携部会、領域部会等の会議や部会を計画通り実施できた。今後も運営のあり方等を改善し、引き続き目標やめあて、指導内容を振り返りながら進める。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	(1) 子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア 考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ 郷土への愛着と誇りをもち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ 保幼小中の接続を意識した教育課程編成 (2) 重点指導 ア 学力向上 (ア) 基礎・基本の徹底 (イ) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (ウ) 家庭学習時間の確保 イ 生徒指導の4つの視点を活かした指導と不登校の解消 (ア) 規範意識の醸成と互いに認め合い、励まし合い、支え合える雰囲気作り (イ) 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 (ウ) 自尊感情の高揚 (エ) 保幼・小・中の連携強化 ウ 今日の課題 (ア) 1人1台端末とクラウド環境を活用した効果的な授業実践の推進 (イ) 「リーディングDXスクール事業」先進事例からの学びの共有(「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実)	○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実として、R5「リーディングDX事業」及びR6市学力向上対策会議授業公開・府小研生活科第2次研究協議会授業公開等の先進事例を活かした研究が継続して進んだ。「自由進度学習」「思考ツールを活用した学習」等、先進的な授業実践もうまれ、授業公開や分散会で教員が学び合った。①子どもが主体的に学ぶ新しい授業イメージを共有した。 ○コロナ後、②地域に出での学習や地域講師を招聘しての学習が数多く展開された。特に中学校では、中1地域学習、中2職場体験、中3福祉施設体験、地域ボランティア等が豊かに実践された。また、学習発表会等で、地域での学習をテーマにした発表をするところが多くあった。郷土への愛着や人とのつながる力を育てることになった。 ○昨年度のDX研究を引継ぎ、各学校で多様で効果的なグループ学習が取り込まれるようになり、子どもが関わりあい、学び合い、共感的な人間関係を築くきっかけになっている。 ○年3回の③家庭学習がんばり週間は、園所から中学生までの全家庭で取り組まれている。兄弟で意識して頑張ることや家族で協力し合うことなど、一斉に取り組むことの成果が表れている。また、この機会に平日頃の生活を見直すよいきっかけになったという感想も多く出てきている。 ○PTA・保護者会を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組を進めることで、学習習慣の定着を進めた。 ○情報機器の望ましい活用(情報モラル)のための④SNS講話学習を小3・4年生、中学1・2年生、中学3年生と、3回実施した。1人1台タブレットの持ち帰りも進んでいるため、どうしても必要な学習となっている。 ○メディア・コントロールについての指導では、

	教育相談部会	養護部会が0期の指導内容についての保健指導案を作成し、⑤年長児への出前講座を実施している。工夫した教具も作成し、効果的な指導となっている。 ○⑥夏季全体研修会で「不登校児童生徒とその保護者への支援」と題して著名な講師の話を聞いた。不登校についての基本的な考え方や対応について全員で学び合うことができた。 ○⑦SSWを招いてピカジップ法を用いた事例研究を行い、児童生徒や保護者の様子や気持ちから対応や支援の実際を学んだ。また、保幼小中の教員が一同に介して事例研を行い、活発な論議により、不登校の未然防止や不登校の解消につながる取組ができた。園所から中学校まで10年間を見通した論議ができた。
幼児児童生徒、教職員の交流と行動連携 協働 教職員 ① ② ③ 子ども ① ② ③	(1) 全体会、全体研修会、公開授業、園所参観と分散会、領域部会、連携部会を中心とした教職員の交流と協働 ア 中学校卒業時の生徒の姿を意識した協議 イ 児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組の推進 ウ 「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア 小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ 振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア 保幼の連携 イ 保幼小の連携 ウ 小小連携 エ 小中連携、保幼小連携 (4) 児童会生徒会合同会議の取組推進による交流と協働	教職員行動連携 ①公開授業（6月久美浜中、11月久美浜小）、園所参観とそれぞれの分散会を実施した。昨年度のDX研究指定の学校での公開授業であったため、その成果を引き継ぎ発展させる形の授業が公開され、学びが深まった。また、園所参観では、保育、教育についての理解が深まるとともに、校種が違っても主体的な学びにつながる手法について考えることができた。 ②夏季全体研修会では、久美浜学園の大きな課題である不登校への対応について、全員で研修することができた。各校種から質問も多く出て、理解が深まった。 ③各校の授業研究会の案内を発出し、連携部会で1人1つは授業を参観するということができた。また、昨年度の研究に基づく授業も自主的に参観するなど、教員の研究（授業改善）意欲が高まった。 ①小小連携授業では、1年かぶと山公園での生活科の授業、3、4年生のSNS講話学習が実施された。また、5歳児交流会はかぶと山登山を予定していたが、登山道の倒木のためかぶと山公園での交流となった。 ②小中連携では、合唱祭参観、部活動体験、授業体験を計画通り実施した。保幼小連携では、小学生の生活科へ5歳児を招待、体験入学を実施した。保幼小連携は、中学2年生の職場体験で3園所へ多くの生徒が行った。また、中学校吹奏楽部が3園所でコンサートを実施し園児と交流した。 ③児童会・生徒会の合同会議は、対面による会議やリモートでの会議を年3回実施した。「夏みかんの日」の取組に係るあいさつ運動やSDGsの取組等を行った。SDGsの取組は、年々充実し、3園所5歳児が全員中学校を訪問しペットボトルキャップの贈呈式をしたり、小学校

		でも子ども服を集めたり、学園としての大きな取組となってきた。
家庭、地域社会との連携、情報発信 ① ② ③ ④ ⑤	(1) 久美浜学園保幼小中一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア たよりの発行 イ リーフレットの作成、配布 ウ ホームページによる広報活動 (2) 学校運営協議会の取組を通じた「久美浜を支える人」の協議 (3) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (4) 久美浜学園PTA・保護者会との連携による家庭教育支援	○様々な取組を様々な機会を通じて広報できた。学園の取組を①リーフレットにし、全戸配布をした。 ○②町区長幹事会、各地区自治会、民生児童委員協議会等への取組説明が実施できた。学園活動の周知や協力を訴えた。 ○③学校運営協議会は3回実施し、学園基本方針等の承認、活動状況の説明、意見聴取を行った。3つの部会では、「久美浜を支える人づくり」「学校園所の応援団としての役割」「地域での子どもに関わる活動」等について、多くの意見をいただくことができた。 ○④中3 夏休み地域ボランティア、中1 地域学習で、自治会や区長さんの協力を得ての取組を行った。生徒が地域とつながり地域を考える貴重な学習機会となった。 ○⑤久美浜学園PTA・保護者会があることで、学園の全家庭で「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」「教育講演会」等の取組ができた。特に、SNS 講演会は、学園PTA・保護者会が主催し、情報モラル高揚の研修ができた。

4 今年度の成果①～⑥ と 課題①②

成果と課題	改善方策
①久美浜学園は、来年度で一貫教育10年となる。10年の成果と課題をまとめていかなくはならないが、取組の柱に掲げた「教職員の協働」も「落ち着いた園所学校、授業」も、「校種間連携」も「地域とのつながり」も、一定できてきた。	・「目指す子ども像」「学園教育目標」「重点目標」「4つの取組の柱」の成果を明らかにし、今後10年の保育、教育の方向性を定める取組を構築することが、来年度の大きな取組となる。そのためには、管理職の構想と教職員全体で論議しようという機運を1年かけて作り上げていく必要がある。
②コロナ以降の保育、教育活動として、様々な取組を実施することができた。園所校内の取組はもちろん、積極的に地域とかかわり、豊かな学習を進めた。	・前例踏襲ではなく、必要なものは残し、効果の薄いものは実施しない、スクラップ＆ビルドを行っていく。
③「リーディングDX」研究が、各校に波及し、確実に授業が変わってきている。子どもたちが主体的に活動し学ぶ授業が進められている。1人1台端末、クラウド環境を活用した授業、教育活動が当たり前のように展開されてきた。	・「個別最適化」と「協働的な学び」「自由進度学習」「思考ツールを活用した学び」などをキーワードに、今後も様々な授業（方法、形態）にチャレンジしていくことが、子どもたちの豊かな学び、探究的な学びを促すことになる。

④経営会議の方針のもと、企画運営会議が事業を運営し、教育課程会議が学習指導、学力充実等に関する内容の具現化を図り、相互に共有して進めるという運営の機能化を図ることができた。 ⑤学園 PTA・保護者会は、コロナ時は会議の開催が難しかったが、今年度は、会長会議 2 回、家庭教育委員会 2 回実施され、充実した取組ができた。 ⑥共同事務室ができて 3 年目、会議の定例化、各種業務の見直し等を進めることができた。また、経験年数の短い事務に対して相互支援の機能を果たすことができた。 △①学園として不登校の課題が大きい。深刻なケースも見られる。日々の丁寧な対応、職員の協働的な対応は続けられている。 △②連携部会の取組は回数が限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることは難しい。	各会議の使命を認識する ・経営会議、企画運営会議は、原則月 1 回の定例会とするのが、今後ともよい。授業研究の充実を目指し、教育課程会議が主となり学園の研究推進を行い、連携部会が具体的な授業づくりについて協議ができるよう、計画的に運営する。 ・園所と一緒にあった学園 PTA・保護者会は久美浜の大きな特色なので、今後とも継続し充実した活動を目指したい。 ・月 1 回の事務部会を実施し、課題の共有化、事務作業の効率化等について、きめ細かく協働することが大切である。 ・今後も教育相談部会での事例研修、具体的な取組の協議等、地道な取組の継続が必要である。 ・未然防止について、事例研修や入学説明会への講師招聘等、スクールカウンセラーの具体的な活用を図る。 ・校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。 ・小学校でも、オンラインを活用するなどして、同学年担任間の交流や連携の方法を模索する。
---	---